

ヤシ殻燃料 初荷揚げ

東北最大規模となる最大出力2万5千瓩の木質バイオマス発電所を秋田市向浜で建設しているユナイテッドリニューアブルエナジー（秋田市、平野久貴社長）は6日、燃料となるインドネシア産のパームヤシ殻（PKS）1万トンを秋田港に初めて荷揚げした。発電所は来年4月に試運転を開始し、同7月に営業運転を始める予定。PKSの使用量は年間約5万トンを見込む。関係者によると、秋田港を利用したPKSの輸入は初めて。

秋田市 向浜 営業運転へ建設進む



インドネシアから輸入したPKS

PKSは、パームヤシの種ルエナジーは、発電所の燃料から油を採取した後の殻で大きさは約2センチ。熱量は一般的な木材の約2倍に上り、バイオマス発電の燃料として近年注目を集めている。

主な産地はインドネシアとマレーシアで、日本の輸入量は、バイオマス発電所の増加により2011年の3万ト弱から14年は24万トに急増した。間伐材の木質チップは、国内では流通ルートが確立されていないため安定的な調達に難しく、割高なケースが多いこともあり、PKSを選択する事業者が多いという。

ユナイテッドリニューアブルエナジーは、発電所の燃料として県産木質チップを中心に使用する計画。PKSは発電効率を高めるために使用するほか、県産材が不足した場合の代替燃料としての役割も担う。使用割合は県産木質チップ7割、PKS3割を基本とし、県内の林業者と連携して年間8万〜10万トの木質チップを調達する。

今回PKSを積んだ貨物船はインドネシアのパダン港を先月21日に出港。6日午前7時半に秋田港向浜岸壁に着岸し、植物検疫、輸入通関の手続きを経て、午前10時から荷揚げを開始した。

1日約3千トのペースで3日間かけて荷を降ろし、10トトラック延べ約1400台で秋田市向浜の同社敷地内に運ぶ。来年春までさらに2万トの輸入を計画し

ている。発電所は昨年11月に着工し、来年3月に完成する予定。総事業費は約12.5億円。年間発電量は一般家庭約3万8千世帯分に相当する約1億4千万瓩時を見込む。再生可能エネルギーの固定価格買い取り制度を利用して東北電力に売電するほか、新電力事業者へも販売する。年間売上高見込みは約43億円。

平野社長は「建設は順調に進んでいる。発電所の建設、稼働で、雇用や物流が活発化し、県内経済に貢献できればいい」と話している。

（三戸忠洋）



秋田港で行われたPKSの荷揚げ作業



秋田市向浜で建設が進む東北最大規模のバイオマス発電所